

卷之三

# —そのルーツと現代的意味を探る—

私たちの祖先は、何よりも人と人とのつながりを大切にしてきました。精霊祭りの座にあるとき、人間の生き方、人間という存在の深さに触れずにはいられません。

のあく日といわれ、新盆の家では竹竿に灯ろうをつけて軒には祖靈の通る盆道もつくられます。

います。この儀礼によつて家々では餓鬼に煩わされることなく先祖祭りができるのです。

益の際の連帯と集団的高揚は、益踊りに生き生きとパフォーマンスされます。

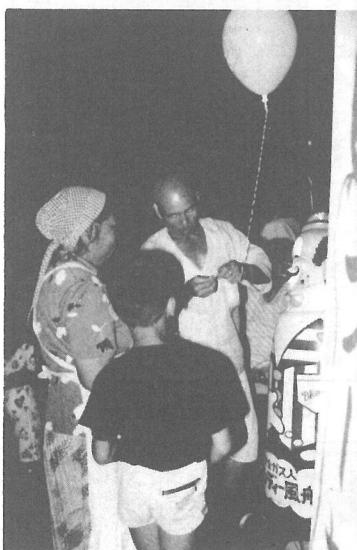
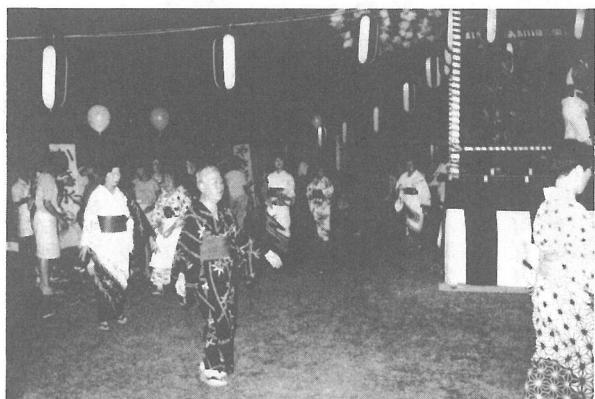
十六日の夕には送り益があります。益棚がかたづけられ灯ろう流しが行われます。

を交わし合います。このときの贈答が中元（七月十五日）と呼ばれています。平素会うことのできない人たちがお互の無事を確かめ合い、先祖とのつながりを確認し、祈りをこめます。ですから盆は、祖靈の祭りであるとともに、生見玉（生者の靈魂）の祭りでもあります。

このよう<sup>に</sup>は、七月の半分以上にわたる行事です。子孫たちが、祖靈を共同で祭ることによつて家族・同族更にムラ人相互のつながりが確認され、それが盆踊りなどを通して強い連帶意識となつていきます。この同朋意識が町づくりの力強い原動力となつていきます。

上町のみなさんの  
協力で行われた老  
人ホームの盆おど  
り大会(8/)

はないでしょうか。そこには意外な、必然的な照応がみてとれるはずですから……。



三年（六五七）のこの日に父母のために“孟蘭盆經”を誦誦させたのが最初だとされています。

十五日ごろには檀那寺で施餓鬼が行われます。これは、帰るべき家をもたない餓鬼たちを僧侶が供養して仏弟子として成仏させ、その回向の功德が、檀那の先祖たちに及ぶ